

## ピエール・ベールの寛容論 その無神論評価とスピノザ像をめぐって

はじめに スピノザ哲学の受容と思想的発展 啓蒙主義からロマン主義へ

スピノザ哲学の受容は時代の思想状況と深く関連している。

ベールのスピノザ論は、宗教的対立の時代における宗教的寛容の課題、典型的には無神論に対する合理的承認の論証に関連していた。ベールは宗教を社会的結合の基礎とすることを拒否し、「有徳な無神論者」の社会を構想することができた。また、宗教を特定の教義から解放し、その核心を良心とみなした。ベールは宗教に関する思弁を批判し、いわば実践的な観点から理性を使用する。

スピノザは有徳な無神論者の経験的確認となる。宗教と道徳が不可分とされた時代に、無神論者であるスピノザは道徳的に優れた人物として模範的な生涯を送った。スピノザの実例は、有徳な無神論の議論に現実性を与えた。

その後、スピノザ哲学は18世紀のドイツ汎神論論争の中でロマン主義的に解釈され、無神論者としてのスピノザ像は根本的に変容する。スピノザ像は無神論者ではなく「神の存在に感激したもの」とみなされる。これに伴い理性のあり方が合理主義からロマン主義へと変容し、スピノザ哲学はドイツ・ロマン主義、さらに北欧ロマン主義への思想的展開に大きな刺激を与える（ヘルダーの『神』及び歴史哲学、ヘルダーリンの合一哲学、シェリングの初期哲学（自我論と自然哲学）を経てステフェンスにおけるデンマーク・ロマン主義へ）。

同時に、この展開の中で有徳な哲学者というベールのスピノザ評価は変更されることなく維持され、スピノザの生涯は多くのインスピレーションを与えた。これはレッシング以来、「聖書」ではなく、「イエスの生涯」が哲学的考察の対象となったことに比せられる。

### I ベールのスピノザ像

#### 1) 『歴史批評辞典』と『彗星雑考』

近年の研究成果によれば、ピエール・ベールは「寛容の思想家」として哲学の歴史において古典的思想家に値すると評価され、またベールを「懐疑主義者」とみなす解釈は克服され、自然法に基礎を置く合理主義者とする見方に転換した。

本発表では「無神論者」スピノザに対するベールの批判が、無神論に対する肯定的評価、さらに寛容性を基礎づける実践的合理主義に依拠することを明らかにしたい。

ベールの著作の中でスピノザと無神論に係わる重要な著作は『歴史批評辞典』と『彗星雑考』である。

『歴史批評辞典』（1696年、1701年）以前に『彗星雑考』（1683）においてベールは無神論を論じた。前者においてはスピノザの項目があり、ここにベールの基本的スピノザ解釈が提示されている。

後者においてスピノザはヴァニーニ(Vanini)とともに、「非難できない品行の無神論者」とされた（後に、ヘルダーも『神』でヴァニーニの名前を挙げる）。良き無神論者という「逆説的イメージ(figure paradoxale)」(文献 5、10)がここにある。スピノザも含めた「有徳な無神論者」については『彗星雑考』の主要なテーマとなる。

#### 2) 『歴史批評辞典』（1696年、1701年）スピノザの項

A) 『神学政治論』については有害な書物と認めながら、これに対する公共的世界の反応を紹介しこれに自己の見解を付加する立場を取る。すなわち、ベール自身は積極的なスピノザ批判を展開せず、スピノザの学説の中で『徳』の果たす役割を承認する。

ベールは、宗教的な事柄においては、理性的な論証あるいは幾何学的な論証の限界を指摘し、「良心」、感情の果たす役割を承認する。ここに信仰と理性の亀裂が確認される。

ところで、『哲学的注解』においても神学的宗教的思弁への批判が展開されている。ベールはいわば実践的な観点からの理性使用は承認するが、思弁的あるいは教義論的理性使用には反対する。

むしろ、信仰を可能にし信仰を支える理性のあり方が探求されるべきである。これは同時に信仰を教義から解放し、良心を基礎にする試みでもある。

### B) 『エチカ』について

ベールによれば、神学政治論よりは「彼の遺稿集で現れた彼の体系を徹底的に破壊する」(文献 1、23)ことの方が困難である。

ベールはスピノザの哲学体系を「きわめて奇妙な仮定(*une supposition si étrange*)に基づく体系」と特徴付ける。これに対しては、この哲学が「最も明証的で最も普遍的な諸公理」に矛盾することを示す方法が最も有効である。ベールがこれを行うにあたり、「彼の第一原理」すなわち「神が宇宙にある唯一の実体であること、他の全ての実体はこの実体の変様でしかないこと」に批判を向ける。

まず、問題なのは「延長」の概念が神の属性とされることである。延長は「諸部分」を有し、複数の実体を想定させる。また、「空虚」の存在はスピノザの体系に矛盾する。ベールはスピノザの体系に相反する哲学として原子論を挙げ、これを肯定する形で議論を展開する。ベールにいれば、神に延長の概念を用いることが不合理なのである。

次に、ベールはスピノザの体系が「形而上学的第一原理」すなわち矛盾律に反すると指摘する。たとえば、愛とこれの排除である憎しみは、複数の人々を主語とする述語であれば矛盾は生じない。しかし、これら相反する用語が単一の神を主語とするときには矛盾が発生する。もちろん、スピノザは「実体」の代わりに「変様」の概念を使用することによってこの矛盾を回避する。しかし、ベールは「両立しない変様が増加するに応じて、実体は増加する」と指摘し、実体とその変様という概念装置、さらに単一実体概念を破壊する。

この単一実体論批判は、激しい道徳的批判に結びつく。ここにベールのスピノザの体系に対する「最悪の嫌悪(*une abomination exécrable*)」が表明される。全てを産出する全的神は「人類すべての狂気、夢想、卑劣、不正を産出する」(68)。戦争でドイツ人がトルコ人を殺害することは、スピノザの体系では「ドイツ人に変様した神」が「一万人のトルコ人に変容した神」を殺害することを意味する。

このように、神を単一実体概念で定義すれば、神は世界の諸悪を産出する主体であるとの側面が暴露される。スピノザの実体概念から導出されうるこの逆説が、ベールによる批判が実体概念を焦点とする根拠である。ベールは「エチカ」第一部を基礎として悪の産出という道徳的含意を暴露したのである。ところで、世界の悪と神との関係はベールの思索における中心的主題の一つであり、同時代における善なる神の擁護というライプニッツによる弁神論を引き出すことになる。また、汎神論論争後のドイツにおけるスピノザ・ルネサンスにおいては、実体概念は「一にして全」(レッシング)というスローガンに翻訳されるとともに、『エチカ』第五部を中心とする解釈により神に対するスピノザの感激が強調されることになる。

### 3) 『彗星雑考』における有徳な無神論者

1682年に匿名で『彗星に関する書簡』を出版して以降、ベールは自己に対する批判に応じて繰り返し無神論に関する考察を展開した。

ベールは『彗星雑考』の中で彗星が人間的悲惨をもたらすとの占星術的偏見を論駁し、天体の運動と人間の自由な行為との関係を切断する。悪たとえば戦争は「人間の恣意の結果」(文献 2、50)でしかなく、彗星は諸天体の因果関係の中にある。彗星についての占星術的偏見は偶像崇拜を強化し、彗星を無神論への警告とみなす見解が生じる。

ベールにとっては、無神論阻止のための偶像崇拜の利用などは誤った思想的構図であり、一つの悪に対して別の悪を対置するにすぎない。この両者の比較に関していえば、ベールは偶像崇拜に対する無神論の道徳的優位を強調する。たしかに、両者とも神を知らない。しかし、偶像崇拜者の誤った行為はその神の観念の故に無神論者の同じ行為よりも罪深い。さらに、偶像崇拜者は誤った諸原理を信じることに於いて偏見を持たない無神論者よりも劣っている。

ベールによれば、人間の現実的動機は宗教ではない。社会の墮落を抑止するのは宗教ではなく、人間の諸法である。また、人間は宗教的な「良心の光」(80)により行動するのではなく、「心の支配的感情、気質の性向、こわばった習慣の力、人がある対象の抱く好みあるいは感受性」(81)によっ

てふるまう。

偶像崇拜者も無神論者も動機に関しては同じである。地獄への恐れを抱く人間が罪を犯すことは経験的事実である。神の存在を信仰する人々があらゆる罪を犯すのであるから、この信仰は罪の抑止に役立たない。罪に関しては信仰の有無は無関係であり、無神論者の方が悪への傾向をもつわけではない。

人間の基本的道徳性、「憐憫(*la pitié*)、節制(*la sobriété*)、温厚(*la débonnairété*)への傾向」(88)は、宗教的信仰ではなく「気質」から由来する。これは「教育、個人的関心、賞賛されたいとの欲望、理性の本能(*l'instinct de la raison*)、あるいは類似の動機」(88)により強化される。

道徳と宗教を切断した後、ベールは無神論者たちの社会を構想する。無神論者の間にも「交際において誠意を持ち、貧者を援助し、不正義には反対し、友人たちに誠実で、侮辱を軽蔑し、身体的欲望を放棄する人々」がいる。

ベールは「有徳に生きる無神論者」を「奇妙な事柄」と認める。しかし、これはキリスト教徒が犯罪を犯すこと以上に奇妙ではない。ベールは「摂理と魂の不死性を否定したエピクロス」(97)を「最も模範的に生きた古代哲学者の一人」として、また「その品行において規則正しく」生きたヴァニーニ(98)を有徳な無神論者の実例として挙げる。無神論者は賞罰等の利害にとらわれず、理性に合致することを求め、「善自体への愛」(105)から善を行う。「有効なもの(*l'utile*)及び快適なもの(*l'agréable*)」ではなく、「誠実性の観念」(106)に殉じた無神論者も存在した。

CONTINUATION DES PENSÉES DIVERSES(1704)において、ベールは新たな諸発見に依拠しながら無神論に関する思弁が経験的に確証されたとする。たとえば、カナダでは「神的本性の連続的忘却の中で生きている野生人たち」(135)が発見された。

ベールは、新たな世界と民の発見という経験的事実を参照し、宗教のない社会の存在について論述する。社会にとって宗教が必要であるとの見解には、人間の保存のために何らかの統治形式が必要であること、次にこの統治形式において宗教が不可欠であること、この二つの仮定がある。しかし、アフリカには「どんな法ももたず共通に何も考えない人々(*des peuples*)」が存在する。人間の保存のために社会生活(*la vie sociale*)は不可欠ではない。これは最初の仮定を反駁する。

ベールは、無神論者たちの社会的結合の見通しを描く。アメリカでは社会的結合に入らない家族が法なしに生きてきた。とすれば、彼らが「共通の支配者及び苦痛と報酬を配分する法典」(142)のもとで結びついたとしても生きていけるはずである。

宗教は社会的結合には必要ではない。人々が社会を組織するのは、「安全に生きる」(142)ためであり、宗教のためにではない。これの実例はアフリカの民(*Cafres*)によって与えられる。こうして二番目の仮定は論駁される。

このように広汎な経験的諸事実にふれながら、ベールは人間の意志に関しては「理性との合致」を求める。知性が三段論法の推論の規則に従うように、人間の意志は正しい理性と合致すべきである。ベールは実例として「父親を敬うこと、契約の諸条項を守ること、貧困な人々に援助すること、感謝の念を抱くこと」を挙げる。このように、経験を重視する思想的発展の最後の段階においても、道徳に係わる合理主義を確認することができる。

#### 4) 『哲学的注解』(1686)における自然法的合理主義

『強いて入らしめよとのイエス・キリストの言葉に関する哲学的注解』は、宗教的強制を徹底的に批判する。ベールは、改宗の強制を正当化するイデオロギー的口実とされた聖書の言葉「強いて入らしめよ」の文字どおりの意味を徹底して否定する。このときに、ベールは宗教的レベルではなく、「自然の光」に導かれて哲学的レベルで議論する。この方法によって、特定の宗教・宗派に偏しない普遍的な論理展開が可能となる。

ベールは道徳に関して自然法思想を採用し、自然法を理性の光とみなす。「自然的で永遠の法(*la loi naturelle et éternelle*)」が「誠実性の諸観念(*les idées de l'honnêteté*)」(文献3、91)を全ての人間に示す。具体的には「恩人に感謝し、自分がして欲しくないことを他人にせず、約束を守り、良心に従って行動する」(93)ことが理性の光に合致することである。これは神に由来する「自然的啓示」(93)であり、これに反する教義は誤りとして退けられるべきである。

興味深いことに、この合理主義は宗教を徹底して内面化する。「宗教の本質」は神に対する内面

的判断、尊敬、恐れ、愛といった諸感情にある。「強制」の文字どおりの意味には脅迫、牢獄、罰金、追放、むち打ち、死刑などが含まれる。しかし、強制によっては「意志の諸判断(les jugements de volonté)」を心の中でつくることはできない。心の中に神についての「確信」が作られ、これから愛、恐れなどの意志が形成される。これなしに外的行為がなされるなら、それは偽善となり誠実性に反する。

次に、ベールはイエスの「福音」を「正しい理性の純粋な諸観念により確証された規則」、「全ての真理と正しさの原初的で本源的な規則(la règle primitive et originale de toute vérité et droiture)」とする。福音は自然的啓示以上に「道徳の諸義務」を展開し、「誠実な善」を拡張する(103)。こうして、ベールは理性の光と福音を重ね合わせる。イエスの奇跡も自然の光に反するのではなく、「理性の諸概念と自然的公平(l'équité naturelle)のより純粋な諸原理」(104)を展開したのである。ベールにとっては、「敵を許し、怒りを静め、感情を和らげること」(104-105)、あるいは、「謙譲、攻撃の忘却、禁欲(la mortification)、愛(la charité)を人間に命じること」(105)が理性的なのである。

異教徒たちの「美しい格率」もキリストの福音も理性的な道徳的諸観念を人間に提示する。これらは徹底して非攻撃的で平和的なものであり、寛容性を実現するものである。

この寛容性に関するベールの思索においては、良心が核心的な役割を果たす。人々は「良心」を「神の声と法」(145)として理解し受け入れている。良心への侵害は神への憎悪あるいは軽蔑と同じであり、国家の権力者もこれを行う権利はない。国家の法も「良心の光」(147)に反する行為を強制することはできない。

ベールは人類に共通する理性的な道徳を可能とし、党派的な対立を乗り越え、社会の寛容性を展望することができた。また、宗教的強制に反対して良心を擁護した。この道徳論が無神論及びスピノザの道徳への高い評価の基礎にあった。

## おわりに ドイツ汎神論論争とスピノザ像をめぐって

ドイツの汎神論論争を通じてスピノザの哲学に光が当てられ、ベールとは大きく異なるスピノザ像が形成される。ヘルダーは、スピノザを無神論者ではなく、「神の存在に感激したもの」と解釈される。

この論争は、ヤコービの『スピノザ書簡』(1785年)がレッシングのスピノザ主義を暴露したことをきっかけとし、さしあたりはレッシングの友人メンデルスゾーンとヤコービの間の論争が行われた。しかし、この論争はドイツの思想界に大きな反響を呼び起こした。特に、レッシングの「一にして全」という汎神論的実体概念が注目を浴び、スピノザ・ルネサンスという状況が生じた。

ヘルダーはレッシングのスピノザ主義をさらに徹底する道を選び、「死んだ犬」(文献5、27)というスピノザ評価を根本的に変更した。彼は『神』(1787年)においてスピノザを「神の存在に感激したもの」と特徴付け、彼を無神論者の刻印から解放した(文献8、702)。

ヘルダーは「世界の外にあるひとつの神(ein extramundaner Gott)」という正統的な神概念を拒否し、レッシングの「力」の概念(文献5、22)に対応してスピノザ的神的実体の属性を力に求める。これは、「永遠の根源的力(die ewige Urkraft)、全ての諸力の力(die Kraft aller Kräfte)」である(文献8、728)。

そして、世界の外部にある神は、ヘルダーによって否定される。神は自然の内でも有機的に作用する力を通じて現れる。この有機的世界観がヘルダーなりの「一にして全」の把握である。この独特のスピノザ主義がヘルダーの歴史哲学の基礎を形成する。

スピノザはもはや無神論者ではなく、その汎神論的実体概念は幾何学的論証から解放され、力と生命に満ちた有機的・歴史的な世界として再構成される。これ以降のドイツ哲学においてレッシング/ヘルダー的刻印をもつスピノザ主義がカント哲学に対抗する思想潮流となる。これは初期シェリングの自然哲学、ヘルダーリンの合一哲学の形成に影響を与え、ステフェンスのデンマーク・ロマン主義へと展開していく。